

# 松富かおりの「世界と日本の安全保障」(17) 「トランプ・プーチン・ゼレンスキー劇場」 の舞台裏

ジャーナリスト・元駐イスラエル大使夫人 松富かおり

## 茶番劇

3月25日、ホワイトハウスは、「黒

海での安全な航海についてロシア・ウクライナ両政府と合意した」と発表した。両国は武力行使の排除に加え、商業船の軍事目的での使用も防止。さらに「エネルギー施設への攻撃を停止する合意を履行する」ことでも確認があった。ロシア側によるとこれには、石油精製所、石油・ガスパイプライン、原子力発電所、燃料貯蔵施設、発電所、水力発電ダムなどが含まれる。攻撃停止は3月18日に発効し、30日間を期限とし延長は可能だが、どちらかに違反があれば即時効力を失う。

ここまでは公開された情報だ。日本のテレビニュースなどを見ていると、トランプがプーチンに気を使っている、ひどく、ウクライナにとって不利

な停戦になりそうに聞こえてくる。実際にプーチンは、経済制裁の緩和など強気な姿勢を崩していない。

もちろん、これから、虚々実々の「館やムチ」を使った駆け引きが行われ、停戦合意はそう簡単にはなされないだろう。しかし、筆者はそれほど偏ったウクライナに不利なものになるとは考えていない。その根拠として、いくつか挙げてみたい。

まず、日本メディアが言うほど、トランプは停戦合意を焦っている訳ではない。焦っているのはむしろプーチンなのだ。どうしてそう言えるのか？ 今、トランプにはやりたい事が山ほどある。同時並行で様々な交渉が世界中で行われており、ウクライナ戦争だけに構ってられない。

そして、これがとても大事なのだが、あの「トランプとゼレンスキー

の決裂した会談」は、ある意味で『芝居』だったと筆者は見ている。国の首脳同士の会談が、これまで40分以上も生中継されたのを見た覚えのある方がいるだろうか？ 他国に仲間外れにされている国同士の首脳が会談して、国内に外交もしているとアピールする（例えば、ロシアとトルコ）以外、機微な問題が語られる首脳会談では、最初の数分の挨拶が終わるとプレスは全て、議場から締め

出されるのが普通だ。しかし、あの会談では記者のみならず、テレビカメラまで残っていた。16年間テレビのキャスターをしていた筆者は、ひどく違和感を持つていた。

筆者は、編集され



松富かおり著  
「明日は戦場にいるかもしれない」  
2014年～2016年、イスラエルに  
特命全権日本大使のパートナーとして赴任。  
書籍購入希望者は下記メールアドレス  
著者サイン入り・送料込みで2300円  
kaori.matsutomi@gmail.com

ていないビデオを繰り返し聴いた。トランプは上機嫌で持論を展開していた。そして起こったのが、突然介入したバンス副大統領の「アメリカは外交を行っている」発言。これにゼレンスキーは厳しく反論し、バンスは「こんなことをホワイトハウスに来てメディアの前で発言するのは失礼だ」と決めつけ、あつという間にトランプも交えた激論になり、トランプの「ウクライナはカードを持っていない。第3次世界大戦のリスクを賭けている」とのショックな発言が出た所でカメラは止められる。

そして、もつと不可思議なのが、会談直後、その場にいたほとんどの米関係者が「これは侮辱だ。協議は打ち切るべき」と大統領に進言している。

トランプは、他者が自分より目立つ事を何より嫌う。バンスは以前から「後

継者になりたいのならトランプに忠実であれ。出過ぎた振る舞いはするな」と周りに警告されていた。

にもかかわらず、流れを変えてまで、「外交発言」で話に割って入り、重要な会談をぶち壊すきっかけを作った。それをトランプは「よくやった」と労っている。腑に落ちないのだ。どうして

## コカインで走る馬

そんな時に「アメリカの影のCIA」とまで言われるシンクタンクを統べるジョージ・フリードマンが、「あの会見は『やらせ(staged)』だった」と発言するポッドキャストを聞いた。

「プーチンを停戦交渉に引きずり出すために、『アメリカは欧州とは違う。ウクライナの絶対的サポーターではない』とプーチンを安心させなければならなかったから、あのような決裂シーンを世界にテレビで流させたのだ」……ああ、そうか、ストン、と全てが腑に落ちた。そう思っただけで見れば、バンスはなんとも大根役者だ。割って入るタイミングにしても、その後のトランプ擁護にしても「ただの太鼓持ち」との感を拭えない。トランプの激昂はまあ、

地でいけるし、「ウクライナはカードを持つていない」と明言し、「第3次世界大戦」まで持ち出して、世界の耳目を集め、プーチンを良い気分させている。良くも悪くも発言の効果を心得ている。今のロシアに第3次世界大戦を引き起こす力はないし、アメリカはそんなことに付き合う気もないと筆者は見ている。トランプは、戦争は嫌いだ。非生産的で非経済的だからだ。しかし、プーチンは、「第3次世界大戦を引き起こせる役者のひとり」と認識されれば満足だろう。アメリカを本気で戦争に引きずり込む国があるなら中国だけだと筆者は考えている。

実は、この会談の直後、トランプはプーチンにメッセージを送っている。「私はロシアを害する気はない。ロシア人を愛しているし、プーチン大統領ともとても良い関係だ。だから、この馬鹿げた戦争を今、終わらせよ！ロシア経済は壊滅的で、事態は悪くなるばかりだ。今こそデイルをする時だ。これ以上の死者を出してはならない！」

実際、ロシア経済は深刻な人手不足（逃亡と徴兵で）により停滞し、年率10%にのぼるインフレが国民生

活を直撃。さらに膨れ上がる軍事費により、経済はこれ以上ないほど冷え込んでいる。銀行は強制的に軍需産業に融資させられ、国際経済研究所のエリーナ・リバコバ氏は「ロシアの経済成長は持続不可能、コカインで走る馬のようなもの」と言う。フィナンシャル・タイムズ紙は「経済制裁で石油収入が絶たれれば、2025年にも流動性資金が足りなくなる」としている。

追い込まれているのはウクライナだけではない。ロシアも、すでにギリギリのところに来ているのだ。フリードマン氏は「プーチンはいつか、ドイツが攻めてくるかも恐れ、バッファ（緩衝地帯）としてのウクライナ全土を取り戻そうとした。その証拠に、北西、東、南の4方面からウクライナを攻めた。4方面から攻めたこと自体、東部だけを狙ったとする主張と矛盾する」首都キーウを狙った部隊はロジスティックス不足で壊滅的ダメージを被り、何日も泥濘で立ち往生してウクライナ軍の餌食となった。ウクライナの砲弾を受け、びつくり箱のように兵士を飛び出させて爆発するロシアの戦車は、ロシア兵の恐怖の象徴になった。

（この辺の事情は「明日は戦場にいるかもしれない」に詳述）

しかも、軍事大国であるはずのロシアは3年かけてもウクライナのわずか20%程度の領土しか支配下に置いていない。100万人近い死者を出したと言っているのだ。よって、ロシアは事実上「この戦争に負けている」と喝破したのがフリードマン氏だ。

プーチンに残された道は、「核」を使って一発逆転を図るか（自殺行為ではあるが）、強行姿勢を維持し、なんとかメンツを保つたままの「停戦」を受け入れるか、ではなからうか。

ヨーロッパの経済制裁で利益を上げてきたオリガーキー達の多くは、すでにプーチンを見限りつつあるとの報道もある。プーチンにこそ、時間は残されていないのではないか？ そのプーチンが受け入れやすくなる舞台をトランプは作るうとしているのではないかと筆者は愚考する。だとすれば、ウクライナ戦争の終焉はそう遠くないだろう。多分1年からはかない。日本企業は、ウクライナ戦争が終わった時に何ができるかを今から、思案しておいた方がよい。（了）